

| | |
|------------------|---|
| Title | 十七世紀に於ける河内(Ke Cho')の様相と性格について |
| Sub Title | On the aspect and character of "Pho-phu'o'ng system" 庸坊制 in Ke-cho' (Hanoi) during the 17th century |
| Author | 陳, 荊和(Chen, Ching-Ho) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1970 |
| Jtitle | 史学 (The historical science). Vol.43, No.3 (1970. 12) ,p.1(395)- 16(410) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19701200-0001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

十七世紀に於ける河内(Kè Chò)の

様相と性格について

陳 荊 和

印度支那古代史及び近世史の研究は、史料が比較的限られているので、考古学や言語学その他各方面の知識を借りることになり勝ちであるが、日常言語の面においても、往々にして一つの地名またはローカルの言葉が、古代社会の解明や理解に重大なヒントを与えるか、重要な参考となる場合がある。例えば、ベトナム語で nước という言葉があるが、これは「水」の意味であると同時に「国」の意味でもある。ベトナム語を習いたての頃はどうしても疑ったが、その中にベトナム古代史関係の史料を漁っている中に、淮南子厚道訓に、「九疑の南は陸事寡にして、水事衆し、これにより、人民は髪を短く切り、体に入墨をして鱗虫に類し、短いつつ袖の衣を着し、ズボンをはかず、水中を抜涉したり、遊ぶのに便ならしめる」という意味の記事に接して、成程と思ったのである。更に広州記や交州外域志の雑民に関する記事をも参照すると、雑越生活様式の概況が明らかとなり、 nước という言葉の意味が実は「水郷」であることが理解出来るのである。またベトナム語で中国人のことを người khách または người tàu とも称する。(文献上では上国人、北国人、北人、呉人、北客等の称呼がある)。 người は「人」で、 khách は「客」であるので、 người khách は「客人」の意味であるが、 tàu は「艘」の越南漢音で船を指すので、 người tàu (艘人) はつまり「船で来た人々」、または「船で

渡って来た商人」のことであり、中越関係史の一面をよく表わしている。一般に中国とベトナムは地続きであるので両国間の通交は陸路によつたものと考えがちであるが、実際には政府関係の公式ルートで広西の鎮南関を経由することがある以外、民間の行ききや通商活動は殆んどが海上交通によつたものであることを今更認識させられるのである。

さて、十七世紀歐人旅行者や宣教師がベトナムについてかいた物を見ると、*Ke* という語を冠した地名の多いことに気付く。例えば、一六八三―八四年にかけて、東京の助任司祭 (*Vicaire apostolique*) であった *Ferreira* 師は、当時北ベトナムから中部ベトナムにかけての各省に、カトリックの伝教員が派遣された「集会所」の所在地として九つの地名を挙げてゐるが、そのうち七つまでが *Ke* のついた地名である。すなわち *Ke-cho*, *Ke-vo*, *Ke-loi*, *Ke-tuom*, *Ke-noi*, *Ke-blou*, *Ke-moi* である。さらに同じ頃のベトナム籍伝教員の報告を見ると、彼らが巡回説教をした地点として (大抵は村落であるが)、*Ke* を冠した地名がやたらに出てくる。例えば、山西処、南定処に挙げられている四十ばかりの地名には百パーセント *Ke* がついており、又安、清化と下るに従つて *Ke* 地名が減つて⁽¹⁾いる。これによつて、紅河デルタ及びその周辺の地名は、昔は悉く *Ke* がついていたことが推察され、*Ke* 地名は東京デルタ特殊のものであることが了解されるわけである。

それでは、*Ke* はベトナム語でいかなる意味をもつた言葉であろうか。まず、日常会話で *Ke* は「笑う者もあれば、泣く者もある」という風に不定代名詞 (*Pronom indéfini*) として、または単独あるいは指示形容詞を附加して、人を指す指示代名詞 (*Pronom démonstratif*) としても使われるし、また安南山脈に住む未開の種族を総称して *Ke noi* と呼ぶことからみると種族を指す語でもある。さらに *Alexandre de Rhodes* 神父が一六五三年巴里で刊行した東京旅行記の東京地図を見ると、京師たる *Ke-cio* (即ち昇竜、今の河内) の周りの四つの省名たる京北、山南、山西、海陽の四省を指すのに、*Kebac*, *Kenam*, *Ketay*, *Kedom* という地名を太字で記しており、その下にそれぞれ *Habitants au*

Septentrion, Habitants au midy, Habitants à l'Occident, Habitants à l'Orient と註が附してある。⁽²⁾これによつてみると、Kéには更に集合名詞としての人間、即ち住民、居民または人民の意味をも有すると考えねばならぬ。

こういう風に Ké は単数または複数の不定代名詞、指示代名詞から種族名、住民を指す集合名詞に転じ、さらに「寄合い」、「衆人」(若者衆とか役人衆とか)のごとき意味合から普遍的に部落または村落名に冠する類別詞のごとき語になったと思われる。普通我々は「村」または「村落」といえば、漠然と田地や田畠に囲まれた一群の家屋の集合体を連想するが、ベトナム語の場合はむしろ広い東京平野やデルタ地帯に点々と散在して、一緒に生活をしている一群の農民の集合体という概念に近い。現今でも Ké を冠する地名はデルタ地帯に若干残っており(例えば、海陽省の Ké sât、河内郊外白梅の Ké mo、太原省の Ké bao のとき)、現に通用しているが、俗語で「村」を指す語は一般に làng となっており làng Hanh-thiên (行善村)とか、làng Kim-lũ (金侶村)とか呼ばれている。làng は字喃で「廊」を当っているが、その語源はとも「人」を指す占語の uran、馬來・インドネシア語の orang と同じ語源であるらしく、ké と làng では言葉こそ異なるが、根本の觀念にはかわりがないと思われる。これはベトナム村落特殊性の一面を表わすもので、ベトナム社会の構成や形態を考える場合、看過出来ない点であると思う。

さて、前置が少し長くなりすぎたが、古くから東京デルタに存在していた ké 地名の中で最も著名且つ重要なものは今の河内を指した Ké-chơ である。十七・八世紀の歐人の書いたものでは Cacho, Cachu, Ké-cio, Checho, Ca-cho, Ké-cho 等の名前になっているが、いづれも Ké-chơ のヴァリアントであることは勿論である。次に十七世紀 Ké-chơ の様相について、欧人の記載を紹介しよう。

先ず一六二六年東京トシキに來た最初の耶蘇会宣教師たる Giuliano Baldinotti は次のように述べている。

「東京城は北緯廿一度に位置している。……そこでは城壁はなく、堡壘も見えない。瓦で屋根をふいた王宮以外のす

十七世紀に於ける河内の様相と性格について

べての家屋は普通樹木のように大きい bambou (竹) と称する一種の葦と稻のわらで造られ、窓がついていない。町の中央に小さい湖があり、火事の際、迅速に消火するのに便利である。既に幾度か火災があつて、数千の家屋が焼失したが、その復旧には四・五日を要するのみである。町の周囲は約五・六リユ一 (lieues 4 km) で、住民の数は頗る多い。町の傍に大河があり、ここより十八リユ一の下流で海に注ぐ⁽³⁾。

次に、一六六〇年の Ké-cho についてイタリア人 Marini Romain (Jean Philippe de Marini) は次のようにいつている。

「若しかりに城壁もなく、堅固な囲もほどこされていらない一群の家屋と無数の住民の集合体を町 (ville) とよぶことが出来るならば、この東京王都の美観は正に一考の価値がある。歐人はこの町が国王常駐の地である故に「王府」(Cour) と称しているが、人によってはここを「市」(foire) とよんでいる。この王府に来たことのある欧人はいづれも当地の建築物に余り感心していない。けだし、この地の建築物は国内の如何なる地方とも異ならないからである。道路にしても、二・三步毎に水たまりがあり、すべての家屋は平屋で、地盤を高くし、洪水期の大水に備えており、路面は補修を加えられたため⁽⁴⁾がない」。

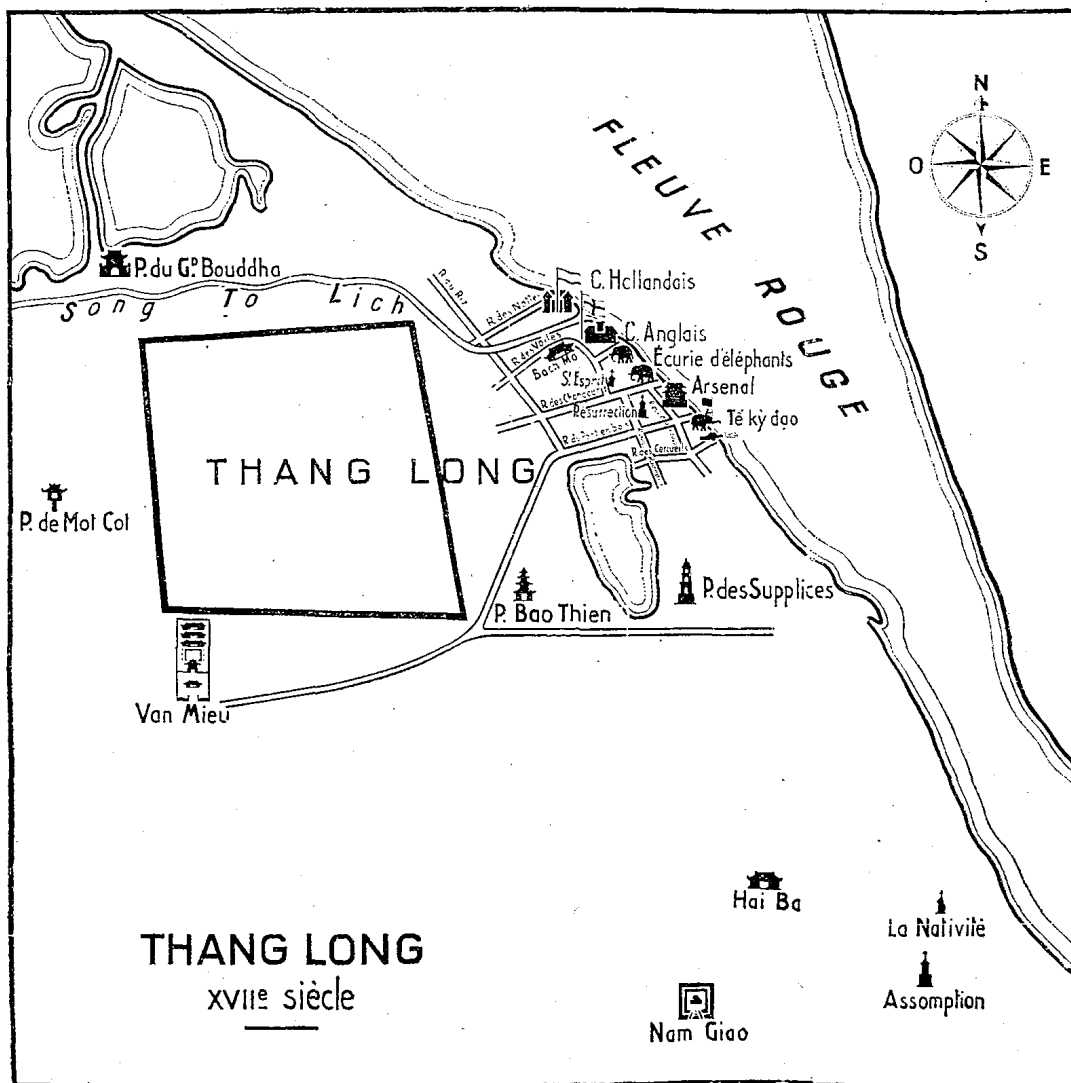
また一六八八年東京に至った William Dampier は次の如くその印象を書き残している。

「ここに来て驚いたことは、Cachao には城壁も、堡壘も、水濠もないことである。しかしこの町の人口は、はなはだ多く、家屋だけでも優に二万戸近くはあろう。この町はソンコイ河西岸の狭い平地にある。その建築物は最近瓦や煉瓦で造られた極少数のヨーロッパ商館を除いては、普通稻のわらと土で造られている。主要の街路は広いけれども、路面の補修がよくないので、雨期ともなると、非常にきたない。王宮は木造ではあるが、可成りの規模であつて、その宮壁の周りは約三リユ一、高さは五・六歩、厚さもそれ位あろう。英国東印度会社の商館は町の北、優美な河畔に位置しており、才

ランダ東印度会社の商館はその南に接している⁽⁵⁾。

以上引用した三つの記事から、十七世紀を通じて東京の首都の様相は殆んどかわらず、大体二つの区劃に分れていたことが認められる。一つは城壁を廻らした王宮であり、一つは王宮の東辺にある無数の貧弱な家屋の聚落である。マリニによれば、当時のヨーロッパ人はこの地を王都とよばずに、「王府」と称したり、或は「市」ともよんだらしく、要するに十一世紀初年李朝以来の昇竜（昇隆）という立派な名前の実像と虚像は大分異るといわねばならない。管見によれば、正式に昇竜または東京とよばれたのは前者、即ち当時の黎朝の皇帝と実際の政治権力を把握していた歴代の鄭主や諸官庁のあった王宮であり、一方俗名 *Ke-cho* の指したものは後者のみすばらしい家屋群の地区に限られたとも思われる。しか
らばこの *Ke-cho* 内部の実況は如何であろうか、これについてマリニは上列の記事につづけて、「土着人のいわゆる *Ke-cho* とは『市』(foire) 或は『市場』(marché) のことである。けだし、東京王国内で商業に従事するすべての人民および外来の物資はみなここに集中するからである。毎月二度、即ち太陰曆の初一^{ついちち}と十五日にきわめて賑やかな定期市が開かれる。この偉大なる王府または『市』を形成する商区は全部で七十二ある。各商区ともイタリー中級都市程の大きさがあり、夫々の商区には商人や職人が充満している。発生しうる混雑や必要とする商貨を探す時間を省くために、各商区の入
口には黒板あるいは看板の類がかけてあり、その商区で販売される商品の種類や数量が記されている」とのべ⁽⁶⁾、また英国人を父とし、安南女性を母として河内で生れ、且つ育った *Samuel Baron* (一六五九年一旦英国に戻り、一六八〇年河内英国東印度会社商館に勤務) も一六八〇年頃次のように述べている。

「*Ke-cho* 住民の数は、特に初^{ついちち}一と十五日に開かれる大市 (*Grand bazar*) の際の人出からいえば、アジアの如何なる都市よりも多いであろう。附近の村落から交易のためにここに集る人の数は信じられない程に多い。道路はかなり広いが、群衆の混雑が余りにもひどいので、半時間で百歩もあるけたらよい方である。しかし、この町には一種の称讃すべき規則



十七世紀の昇竜
(H. Bernard 原図)

が守られている。それは販売される各種商品が夫々特定の商区を持っていることである。同時に各商区は一・二個、あるいは若干個の村落に専属しており、特定村落の村民のみが、その商区で店を出す権利を保有している^(?)。

上引文によって、十七世紀に於ける Kè-cho^o の輪廓はほぼうかがわれるが、我々の注意を引くのは、第一に Kè-cho^o が数多の商区から成立っており、各商区別に異った商品を扱っていること。第二に各商区がそれぞれ、一つ又は若干の村落に専属していることである。

Henri Bernard はその Le Hanoi des Portugais et des Hollandais と題する論文において、「一六二七年 Alexandre de Rhodes が到った河内と、一八七三年の地図に見られる河内は正確にいつて

一つの都市ではなくして、実は一つの「混合聚落」(agglomération composite)であって、そこには同じ圏の中に行政首都と商業都市と数多の村落が並存している⁽⁸⁾とのべたが、ベルナルのいう商業都市と数多の村落とは実は同一であって、ベルナルは *Ké-chô* 内の個々の商区を村落と見たと思われる。

まず、商区の数から歴史的に考察を進めていこう。上引文の如く、マリニによれば十七世紀 *Ké-chô* における商区の数七十二である。大越史記全書(本紀実録卷四)によれば、黎聖宗の洪徳二十一年(一四九〇年)全国版図を十三承宣処に分けた際に府、県、州、郷、坊、社、村の総数が示されているが、それによると、坊(*phông*)の数は三十六となっている。「坊」は勿論中国における古来の用法と同じく、京師の区劃の単位であり、さらに河内開智進徳会出版の越南字典、または一九六六年北京で出た越漢辞典は、昔同業の商家が密集した区域とも解しているので、この「坊」は *Ké-chô* 内の商区を指すことに間違いはない。さらに同書本記(卷五) 陳紀一・陳太宗建中六年の条には、

「定京城左右伴坊、傲前代為六十一坊、置評泊司」

と見えているので、坊の数は陳朝の「前代」たる李朝時代から陳朝にかけて六十一であったこと、さらにこれらの坊は政府によって設定されたもので、その監督取締りの役所として評泊司もおかれたことが了解される。ところが十九世紀後半になると、坊の数は三十六となっている。当時の河内の景観をのべた六八体俗謡の一句に、

Hanoi ba mươi sáu phố phường,

Hàng gạo, hàng đường, hàng muối trắng tinh,

(河内三十六の庸坊。

米屋、砂糖屋、塩屋いづれもまばゆいばかり。)

とうたわれ、また十九世紀の後半を河内で過した一老婦人 *Madame Hirondelle* の回顧談に、

十七世紀に於ける河内の様相と性格について

「所謂る河内三十六庸坊とは現在の Petit lac と紅河間の区域を指すが、都市 (ville) の名称でこの区域を指すのは少しオーバーであって、その実際の形態は一個の比較的大きな村落に異ならず……各庸坊は夫々別個の独立した区劃で、周囲には密茂した垣根をめぐらし、特別の門を有している……私はなおも穀物門、醬油門、棺桶門等の門を覚えている……毎日夕ぐれともなれば各坊間の門は封鎖され、随って各坊間の交通は完全に杜絶する。」⁽⁹⁾とある。

このように Ke-cho における坊、すなわち商区の数は年代順にならべると、李 (一〇一〇〜一二二五)、陳 (一二二五〜一四一三) 時代の六一、黎聖宗時代 (十五世紀末葉) の三六、黎朝中期 (十七世紀) の七二、阮朝中期 (十九世紀後半) の三六というふうになっている。十五世紀以来の五〇〇年間に商区の数が三六―七二―三六と変るのは奇異な感じをうけるが、吳廷柔氏 (Ngô Đình Nhu) は生前三六の坊がそれぞれ両分されて、実際の数は七二であるとの見解をもっていた。⁽¹⁰⁾

次に各商区と特定村落間の関係、またはその結びつきを考えてみよう。周知のごとく、東京デルタの根本的性格は農業社会である。この地の農村は純然たる農業生産のほか、古来相当程度の手工芸と初歩の工業を發展させてきた。中越両国の二千年にわたる交渉史からみれば、各種の手工芸は固有のものを若干温存しており、古いところでは甘蔗錫 (甘蔗の汁を濃縮させたアメ状のシロップ) や、凝固させた固形の石蜜は交趾の特産品かつ朝貢品であり、漢高祖や孫亮の宮廷で珍重された (後漢楊孚の異物志、三国志、吳志三、孫亮伝⁽¹¹⁾)。近いところでは、象嵌細工は十八世紀阮金の發明であり、河内長錢街の傍らにその專業の坊があった。しかし手工芸の大部分は中国からの模倣ないしは影響を多分にうけていた。伝によると、六世紀の頃、陳和、陳演、陳田の三兄弟が中国にて銀細工の技術を習って帰り、弟子たちにその技術を伝えたという。また十世紀末〜十一世紀の初め (前黎朝) に、范敦が朝貢使として中国に赴いた際、広西の人から草蓆を織る技術を習って、帰国後大いにそれをひろめたという。十五世紀中葉には木板印刷となめし皮の技術が中国よりとり入れられ

た。それまで一切の木版印刷は中国職人でなくてはできなかったが、その頃梁汝学が中国に使用した時、木刻印刷の技術を覚えて帰国した。同一時期、劉春信も中国の手法によって河内で初めて銅錢と金塊を鑄造し、また陳将公も中国の河南省で漆細工の技術を覚えて、帰国後は昇竜王宮内の職人に伝えている。十六世紀初年には中国に出使した黎公行が中国で刺繡と罗傘からかまを、また同世紀、中国に使用した馮克寬どんすは綢どんす(地質の厚い精巧な絹織物)を織る技術を国内にひろめている。⁽¹²⁾このように中国に赴いた使者がいろんな技術を習得して帰ることは、日本の遣唐使にも似通っている。

一般的にいて、デルタ農村の工芸は農耕の傍ら生産する副業であり、別の面からみれば完全な家庭工芸でもあったし、また生産の方法からいえば純粹の手工業でもあった。またこの種の「副業的家庭手工芸」は村落を単位として專業化の傾向をも引起す結果となる。潘嘉紆 (Phan-Gia-Bén) の「越南手工芸發展史初稿」によると、かかる村落專業化の傾向は黎初(十五世紀前半)にはじまるとなすが、この傾向はずーつと第二次大戦直前までつづいている。又 P. Gourou の調査によれば、一九三〇年代に至るも陶器、笠、簍、紙等のごとき日常用品の生産は完全に特殊の村落に限られていて、都市においては殆んどみられず、またその他の手工芸にしてもこの傾向はきわめて濃厚である。これは各種手工芸に従事する職人の数からみても充分に察知されるところである。

P. Gourou (13)

| (手工芸名) | (職人総数) | (專業化せる村落内職人の数) |
|--------|--------|----------------|
| 織物業 | 二一、〇〇〇 | 一六、〇〇〇 |
| 絹織物業 | 七、五〇〇 | 六、〇〇〇 |
| レース業 | 六、一〇〇 | 四、二〇〇 |
| 刺繡業 | 一、三五〇 | 一、二〇〇 |

十七世紀に於ける河内の様相と性格について

| | | |
|----------------|-------|-------|
| 釣 具 業 | 二、八五〇 | 二、六〇〇 |
| 漆 業 | 三、七〇〇 | 二、〇五〇 |
| 各種竹細工、 ザル物業 | 三、八〇〇 | 三、四〇〇 |
| 銅器、銅細工業 | 一、七〇〇 | 一、五〇〇 |

これらの数字はデルタ農村における手工芸職人の人口が都市にくらべてはるかに多いことを示しており、かかる傾向は時代が古ければ古いほど甚しいことはもちろんである。手工芸の農村に於ける偏在ないしは村落生産專業化の傾向は、原料の偏在あるいは交通の条件の如き合理的な理由では説明出来ず、Gourouの意見では、その原因は村落民間の連帯性と横倣性、或いは古来ベトナム人民に見られる特殊の風習に求めるべきであるとなしている。⁽¹⁴⁾

村落專業化の傾向は又必然的にその生産方法や過程の秘密を保持せんとする動向につながり、デルタ地区多くの農村で特殊な風習を発生せしめている。例せば、

一、他村へ嫁にいった娘にはその本籍の特産物の製造を許さない。若し自家用として少量製造するならば、必ず原籍の村へ戻って作らねばならぬ。この風習は何東省義都村 (sucre de riz へおこし) 製造の専門村) に今も見られる。

二、特産物生産の秘密保持のため、若干の村落では村内の娘が他村に嫁にゆくことを許さない。又若干の村落では生産の秘訣は男子、或は既に成人し、母親となった女性にのみ公開し、未婚の女子には知らせない。これは何東省の米池村、弩伴村その他に残る風習である。

こう云う生産機密保持の観念は勿論販売独占の精神と表裏の関係にある。かかる專業と独占の基礎に立って、村落共同体の核心をなす守護神、公田、公土、同姓、郷土観念等の精神的、血縁的結合体が存続しうるわけで、これらの諸要素が

互いに融合して成立した共同の感情が、内部に於ては村落民の団結を促し、外部に於ては村落間の競争を激化することになる。

專業と独占の傾向を有する農村の生産は、その傾向が大きければ大きい程、交易場所である「市」を必要とし、その発達を促す。デルタ地区には各地の経済条件に適合した多くの「市」がある。こう云うインター・ヴィレッジ間の「市」は普通著名な「亭」(守護神の社)又は「厨」(仏寺)の附近に、又は若干の村落を結ぶ道路の交叉点に設けられるが、いずれも日本の「日限市」の如く定期的のもので、三日、五日、或は十五日毎に定期的に開かれるが、最も多いのは「五日市」で、各地区の情況に応じて、市日が重ならないように配慮されるのが普通である。

Ké-chò の市日は十七世紀ではマリニヤバロンの云う如く月二回となっているが、ベルナルによれば十九世紀の後半には五日市 (Bernard *Et les jours de marché, tous les six jours* となっている)となっていたようである。

Ké-chò がベトナムの政治中心として出現するのは宋平と云う名で、隋大業三年(六〇七)の交州々治設置に始まる。それ以来、唐代を通じて、この地には大羅城が築かれて唐朝安南統治の中心となり、十世紀中葉独立王朝が出現しても、丁朝(九六八―九八〇)、前黎朝(九八〇―一〇一〇)の約五十年間都が寧平省の華閩に移されたのを除いて、安南の中央政治勢力はづうっとこの地をはなれたことがない。一〇一〇年李太祖が都を華閩から大羅城にうつし、昇竜(Thăng-long)と改名し、更に陳朝末期胡氏篡奪時代(一四〇〇―一四〇七)に清化を西都、昇竜を東都と称したが、黎太祖の順天三年(一四三〇)、更に東都を東京、西都を西京と改称した。東京の名称はここに始まる。更に阮朝の明命十二年(一八三二)になって正式に河内(Hà-nội)とよばれるようになった。このように、歴朝の首都たることが Ké-chò 繁栄の要因の一つであるが、同時に交通の便利(デルタの中心に位置すること)は Ké-chò をして全国生産物の集散地たらしめ、又デルタ人口の増加、農村手工芸の発達等がこの地に一大交易市場を成立せしめたのである。従って Ké-chò 商区の区分

と特定村落独占権保有の現象はデルタ農村手工芸專業化及び独占販売の反映であると見ることが出来る。特に十七世紀後半以降、ヨーロッパ商業資本がベトナムに進出したのち、Ké-chô⁹の繁栄は更に増したと思われる。

次に各商区内の組織については、陶維英氏 (Đào-Duy-Anh) は陳朝から各坊の各生産業者及び職人は既に自己の組織としての作坊又は行会があり、作坊には「正坊」又は「坊長」がおかれ、朝廷からの政令を伝え、又坊間の行政事務にたずさわり、かかる作坊と行会の組織は手工芸者と小売業者の職業権利と社会地位を保護するのが目的であったとのべている。(陶維英、越南歴史、上冊、頁一四五)。Baron も又「Ké-chô⁹ 各商区の性格は欧州諸都市の会社 (Company) 或は職業団体 (Corporation) の組織に類似する」と言明している⁽¹⁵⁾。史料の欠乏により充分なことはわからないが、作坊ないし坊会なるものは一種の同業組合 (Guild) であり、中国宋代にみられる業種別に結成された「行」、「団」、「作」と同じ性格で、共同の取引市場をもち、營業の独占と互助をはかるものと思われる。もちろんギルドとはいっても西洋中世末期のギルドのように都市の自治を確立し、旧体制を改革せんとするものではなかった。

以上述べたことを更に中国や日本の場合と対比して考えると大体次のようなことがいえると思う。昇竜、即ち Ké-chô⁹ の「伴坊」又は「庸坊」の制度は日本の平城京や平安京の条坊制と同じく、明らかに唐長安や洛陽の都制を以て代表とする中国古代都市制をまねたものである。周知の如く、長安では北端に位置する皇城の朱雀門から出た朱雀大街をまん中にして、東街、西街に分け、両街を小さきままの矩形の坊に仕切った。その数は百十坊あり、いちいち吉祥な字を選んで坊の名称とした。各坊の周囲には低いながらも土塀をめぐらして盜賊などを防ぎ、坊門には左右の「街使」が部下を率いて武候舗という交番の如き詰所に陣取り、常に坊内を巡視して治安を維持した。日出とともに宮城内から発する太鼓八百声にに応じて城坊の門が一斉に開かれ、日没時には同様八百声の鼓のひびきにに応じて、あらゆる門が閉じられ、それ以後は外出も他坊にゆくことも禁ぜられた。いわゆる「金吾の禁」である。上述せる李、陳兩代に於ける「左右伴坊」というの

は明らかに昇竜を左と右の二区に分けたものであり、又「伴坊」というのは、「伴」の字の原義は人の「かたわれ」のとであり、二つに分ける意味を有するのであるから、左右両区に同数の坊が置かれたことと解してよく、恐らくは両区に三十づつの坊があり、別に一坊を設けて評泊司の所在となしたのではないかと想像される。但し昇竜の「伴坊」は長安や平城京のように「ごばん」の目のように整然と区切られたものではなく、大体王城の東側城壁と紅河とプテット・ラックを三辺とする三角形の区域に区劃をつけたものである。昇竜の各坊には勿論夫々坊名があるが、それは長安の各坊とは大分趣を異にしたものようである。昇竜各坊の名称はよるべき史料を欠くが、只一つ吾人にかかりのサジェスションを与える所伝がある。大越史記陳聖宗紀(卷五)宝符二年(一二七四)十月条によると、当時元の南侵がはげしいため、宋人が船三十艘に妻子、貨物を載せて大越に逃避して来たので、聖宗はこれを收容し、昇竜の「街媮坊」に集団居住せしめ、かれらは反物や薬材をうって市をなしたと記している。この「街媮坊」は我らの知っている唯一の陳朝時代の坊名であるが、今迄解釈を加えた者がない。管見によれば「街」(nhai) は普通の意味の「まち」、「ちまた」の義で、「媮」はベトナム語で反物を意味する v'ai の字喃であり、「街媮坊」とは「反物、布地をうる町の坊」と解すべきであると思う。若し愚見にして誤りなしとせば、昇竜の各坊は唐代長安のように吉祥の意味のある嘉字にのっとり命名されたのではなく、各坊にて販売される商品の類別によって名付けられたと見なされる。

かように見てくると、昇竜の坊制や都市としての形態は中国古代都市の鰲形であると言っても差支えない程であるが、ここに注意すべきは中国に於ては秦漢から唐代にかけて維持されて来た里坊制や市制は農業や諸産業の進歩、交通商業の発達によって唐代中期から徐々に消滅して、宋には新しい形態の商工都市が発生し、自由なる商工活動が行われたことである。北宋の都であった開封や南宋の都であった杭州(臨安)がその典型である。張昞端が開封の繁栄を描いた「清明上河図」や谷文晁が師の張秋谷のもたらした原図を摸した「杭州四季風俗図」を見ると、街路には各種の店舗が軒をつらね、

食器、筆墨、陶器、両替屋、洒楼、妓楼が立並び、唐代以前の都市とは景觀が全然異っている。殊に杭州は河川による輸送の便利と発達した商業組織によって、江蘇・浙江両地域の經濟中心のみでなく、全中国及び東アジア商業圏の一大集散市場になり、ここには一技一芸に秀でた優秀な職人が集り、金銀器、銅器、磁器、漆器、絹織物、書籍等国内にても国際的にも有名な特産品がつくられた。これに反して、十九世紀後半の Ké-chò は「市日ともなると隣近の田舎からあらゆる種類の物うりや職人が出て来て、絹商人は *rue de la soie* へと、刃物商人は *rue aux cuivre* へ、笠(帽子)の製造者は *rue des chapeaux* へと云う風にそれぞれ関係のある区域へ参り、かくして町全体が巨大なバザール(Bazar)と化し、そこで人々はいったり来たり、ぶらついたたり、おしゃべりしたり、値切ったり、がやがやとわめいたり、すでに多い平常の人口の倍にも達する。⁽¹⁷⁾」これによってみるに、昇竜は唐代中国都市のパターンをそのまま十九世紀後葉までづうっと受継いで来たわけであって、Ké-chò なる俗名によってもうかがわれる如く、生産力の低い、閉鎖的ベトナム農村社会最大定期市としての面影を濃厚にのこしている。かかる現象は大ざっぱに云って勿論十世紀以降のベトナム歴代王朝の封鎖的、孤立的対外政策、永年の専制王朝による庄政と国内の分裂が先ずその主因であるが、歴代王朝の商業に対する軽視や対外貿易独占の傾向も看過出来ない。例えば、成世偉(Thanh-Thê-Vy)の「十七・八世紀ベトナム貿易史」(一九六一年刊)は黎朝の皇越律令を引用して、「京師に寓居する職人及び商賈は商店を開くことを許さず、違犯せるものは八十杖の罰に処する」と云⁽¹⁸⁾っている。これは要するに、定期市の開設と維持のみを許可することで、都市の形成を阻止することでもあり、それでは、商業の発達はおろか、新しい形態の都市が出現する余地はないと云わねばならぬ。又陳朝以来、中国に対する警戒心と国内の機密保護のため中国人を始めとする外国商賈を京師に寄せつけず、東京湾上の島である雲屯にて貿易をさせ、十七世紀初葉になってから舗憲に、一六六〇代になってから始めて外国商人を Ké-chò に居住を許している。又対外貿易は王家を始めとする特権階級の独占事業であり、生絲、絹織物、沈香、肉桂の如き重要物産はみな王家の専売であ

った。外国の商品に接しない農民に工芸や商業の発達、又は生産技術の向上を期待することは無理である。特に十七世紀初頭から鄭・阮両氏の南北対立とそれにつづく西山の動乱で国内の生産は疲弊の極に達し、十九世紀初年阮朝によって統一が一応実現されても、内乱や外征が引つづいて生産の恢復が思うようにいかない所へ、フランスの八十年に及ぶ悪質な植民地支配が始って、その間産業革命とか工業化なることは思いもよらず、Ké-cho は昔のままの形態で第二次大戦と新らたな南北戦争に突入したわけである。こういう風に河内の都市としての形態と機能及び農村との関係がごく最近まで中国唐代都市の形態をほぼそのまま温存して来たということは本質的に云って矢張り、アジア農業会社に於ける停滞性と後進性の一つの具体的な表われであり、同時に中国文化圏に於ける中国文化受容の一つのパターンであると見られると思う。

附註

- (1) Adrian Launay, Histoire de la Mission du Tonkin, Documents Historiques, I. 1658-1767, Paris, 1927, pp. 252-253, 439-440, 441
- (2) Divers voyages et missions du P. Alexandre de Rhodes en la Chine et autres royaumes de l'Orient, Paris, 1653 収録の地図。
- (3) La relation sur le Tonkin du P. Baldinotti, BEFEO, T. III, pp. 77-78
- (4) Marini Romain, Histoire nouvelle et curieuse des royaumes de Tonquin et de Laos...traduite de l'Italien, Paris, 1666, p. 104
- (5) W. Dampier, Suppléments aux remarques géographiques sur le Tonkin, Histoire General des Voyages, nouvelle edition. La Haye, 1755, t. XI, p. 409
- (6) Marini Romain, op. cit., pp. 109, 111
- (7) Samuel Baron, Description du Tonkin, Hist. Gene. des Voyages, Nouv. ed., t. XI, pp. 376-377
- (8) Henri Bernard, S. J., Pour la compréhension de l'Indochine et de l'Occident, Hanoi, 1939, p. 131
- (9) G.P., Madame Hirondelle nous parle du Vieil Hanoi, Indochine, 3e année, No. 74, 1942, p. 5
- (10) Henri Bernard, op. cit., p. 137
- (11) 戴国輝、中国甘蔗糖業の展開、アジア経済調査研究双書、第

- 一二九集、東京、1967, p. 9~12
- (12) 潘嘉紉 (Phan-Gia-Bên) 著、何廷慶訳、越南手工芸発展史初稿、北京、1959, p. 17, 19
- (13) P. Gourou, Les paysans tonkinois, étude de géographie humaine, Paris, 1936, p. 527
- (14) Ibid., op. cit., p. 528
- (15) A Description of kingdom of Tongueen by Samuel Baron, a native thereof, p. 657 (John Pinkerton, A Collection of the Best and most Interesting Voyages and Travels in all parts of the World, London, 1811 収録)
- (16) Vai (反物、布地) の字喃は普通「繩」に作り、「尾」(S. V. Vi) を表符とつじらぬ。これを対して、「備」の表符は備 (備 s. v. bi) であるが、vi と bi は近似音であるから、備と繩は相通であつたと思われる。
- (17) 一八八三年 Labarthe の紀行文による。Masson, Hanoi, pendant le période héroïque, 1929, pp. 135-136; Henri Bernard, op. cit., p. 138
- (18) Thành-Thê-Vỹ, Ngoài Thương Việt-Nam, hồi thế kỷ XVII, XVIII và đầu XIX, Hanoi, 1961, p. 190
- (本稿は一九七〇年三月九日、慶応義塾大学言語文化研究所総会席上での講演の要旨である)